よねだところどころ

ヨナダーが下米田・牧野の色々な見どころを紹介するよ

第十九号

則光の扇状地と地名

則光の冨田は扇状地であった

加茂郡誌に掲載されているが現在の小字名図に掲載されていない則光の小字地名は、川端・大久田・大沼・川原前・川原裏・八幡前・野勢である。

ただし、郡誌にはないが現在の小地名として「富田」がある。多分、上記の消失した小地名は「富田」に集約され、改変されたと思われる。一般に地名を改変するときは「縁起の良い文字」を当てる傾向があり、「富田」は文字の通り「良い田・富みを生む田」を表すとすれば納得が出来る。

すなわち、上流からの土石流が流入する環境の小地名があるかどうかを検証することである程度は裏付けが可能である。まず、「八幡前」は則光の氏神八幡神社の前と考えて差し支え無いであろう。この例は信友の「羽掛前」や「天神前」と同じである。

次に「川端」はその名の通り「川岸・川のそば・ふち」と解してよい。当然大平谷川からの河川が河岸段丘面に出ていたはずであり、その古河川の縁にあった地名と解釈できる。

決定的なのは「川原前・川原裏」であろう。川原は河川が流出する堆積面であり、洪水時には当然水没する環境にある土地である。もし「富田」を含む範囲にこの地名があったとすれば推察は正しいということになる。また、「大沼」はその名の通り「沼」であり、上流からの河川が土砂を堆積し、小さな扇状地をつくっていたとすれば、その扇端部に沼を形成することは十分に考えられる。さらに、「大久田」の「クタ」は、「クテ」ともいい、(地名の語源による)「湿地」を表現することから河川の付近に存在する「大きな湿地」と考えて良いであろう。

現在則光地区に見られない7小字のうち、5つが氾濫を起こす河川に関係のあることが判明する。最後に「野勢」のせであるが、「野馳」(ノセ)という地名は「ノチ」から来ていると考えれば、それは「野地または沼地の意味」で「湿地」の地名と解することもできる。いずれにしても、「富田」は「富を生む田」というイメージで解することができるが、ひよっとすると以前は、水害が多発する厳しい土地で、上流の土石流が被害をもたらす場所であったかもしれない。しかし、県の土石流対策事業により多くの堰堤と治水調整用のため池が改修され、危険性が減少し現在のような水田や住宅として利用されるようになったと考えられる。